
騎士物語

レイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士物語

【Nコード】

N3773P

【作者名】

レイス

【あらすじ】

どこか遠い異世界のお話し。 その世界では魔物と呼ばれる謎の生物が人を襲い、各国はそれらを討伐することに、躍起になっていた。しかし、数百以上の国々からなるこの世界は、魔物に関するそれらを除けば大きな争いもなく、平和だった。 主人公のフィリアは大国、アメリカ王国の姫、シンシア姫直属の近衛騎士として暮らしている。 ある日、魔物の討伐任務に駆り出されたフィリアだったが 処女作、更新不定期、1話が短い、誤字脱字あるかも・・・それでもいいのならよろしくお願いします。

プロローグ

私が3歳くらいのころ。

物心の付いたときくらいに一つ、鮮明に覚えている思い出がある。

国を治めている王様のお妃様の誕生日パレード。

私たちの家族は奇跡的に最前列という特等席で華やかなパレードの様子を眺めていた。

それだけでも、記憶に残る出来事。

でも、更に印象に残る出来事があった。

まだ幼い姫様が私の方を向いて笑みをかけてくれた。

今思えば、それは偶然や単なる思い過ごしだったかも知れない。でもそれが私にとって大きな出来事だったことに違いはない。そして私は幼いながらに想いを両親に伝えた。

「騎士になりたい、騎士になつて姫様を守りたい」
・・・と。

両親はこころよく了承してくれた。

その日以降、私は騎士になるための鍛錬を続ける日々が始まった。幼かった頃や、病にかかって武器を持てないときは、母から礼儀作法や言葉遣い、簡単な医学、文学なども学んだ。

大きくなつてからは、父からとにかく武器の扱いを覚えた。

剣術に槍術に弓術はもちろん。

戦斧やメイスといった重い武器や、弩やクロスボウなど特殊な物まで、いろいろと叩き込まれた。

長い長い間続けた訓練と、両親のおかげで私は、今、姫様の近衛騎士として、姫様のお側にいることができる。

プロローグ（後書き）

お読みいただいております。
しばらくの間はグダグダラダラとなっていますので注意して下さい。

異変 1（前書き）

いきなり場面転換しています、注意。

この話・・・自分で書いていて何のかわからなくなって参りました。
すごく不安です。

このグダグダがデフォルトだと思ってお読み下さい。

異変 1

アメリア王国の城内の一室では、魔物に関する作戦会議が行われていた。

少数の魔物が現れ、人を襲ったから退治する。

会議の内容を要約するこのような形になる。

そして、その討伐作戦に私も連れていかれるのだ。

近衛騎士とはいえ、非常時以外は一般の兵士と何ら変わりはない扱いを受ける、逆に言うと一般兵の仕事は近衛騎士の仕事でもあると言うこと。

私としては姫様のお側を片時も離れたくはないのだけれど。

・・・文句を言っても何にもならないから考え方を変える。

姫様に私の活躍を聞かせるために魔物討伐任務を受けると。

そう、武勇伝みたいな話を作ろう。

剣の腕は今まで磨いてきた、きっと大丈夫。

「フィリアさん・・・？」

「・・・っ姫様！」

後ろを向くと、私の主でもある姫様がおられた。

「あっ・・・驚かれてしまわれましたか？」

「いえ、そんなことはありませんよ、何かご用ですか」

「初めて魔物の討伐任務に行くのでしたよね、つい先ほど初めて耳にして、それで・・・」

「はい、もうすぐ出発ですよ」

姫様は少し辺りを見てから言った。

「戦功などいりません、ただ生きて帰って下さい、私はそれだけ言

いたくて・・・」

「はい、誠意努力します」

私はそう伝えた。

魔物の強さはまちまちだ、弱いのがいれば強いのもいる。

魔物との戦いで命を落とした者も少なくはない。

自分の剣の腕を過信したまま、戦ったことのない敵と戦うことは危険な行いだ。

姫様のおっしゃる通り、生きて帰ることを考えようと思った。

「姫様・・・そろそろ行かなければならないので」

「わかりました、お気をつけて」

なんとなく不安そうな顔を姫様はしていた。

異変 1（後書き）

キャラ紹介

フィリア 16歳 女

シンシア姫の近衛騎士。

性格

- ・基本的に真面目
- ・姫様一筋
- ・やや優柔不断

服装

- ・基本的に鎧
- ・私服は地味

武器

- ・トウハンドソード
- 全長250cm 重量6.5kg
- ・ミセリコルデ
- 全長30cm 重量0.1kg

幼少の頃に一目惚れしてからは姫様一筋

姫様の意見は自分の意見とし、こころこころ考え方を変える

剣の腕はけて悪くはない

6キロの大剣を振り回せるほど力が強い。

異変 2（前書き）

やっとそれっぽくなってきました。
遅筆ですみません。
読みにくい文章ですみません。

異変 2

不安そうな姫様の顔が私の頭からはなれなかった。
どうしてあのような顔をしていたのか。
そればかりが私の頭をかき乱していた。
・・・ただ考えていても仕方が無いのかもしれない。

姫様に言われた通り、城まで生きて帰ること。
それだけを考えることにした。

これだけなら私のすべきことがはっきりしているし、姫様の一番望んでいたこともある。

そして、そのための訓練を私は毎日してきていた。
そう思うことで気持ちが少し楽になった。

気持ちを落ち着かせるため、空を見た。
澄んだ空が見えたのだが・・・視界の隅の方にどす黒い醜惡な物。
魔物が見えた。

魔物の出現ポイントまでまだまだ先だったはずなのに。
考えても仕方が無い、敵が現れたのだから倒さないと。
戦うための訓練は沢山うけてきたはずだ。

異変 2（後書き）

キャラ紹介

シンシア 15歳 女

性格

- ・おっとり
- ・心配性
- ・ドS

服装

- ・お姫様らしいフリフリドレス
- ・実は動きやすい服装のほうが好きで、部屋着は軽装

武器

- ・姫様だから使いません、嗜んではいる

おっとりしているが頭の回転は速い
フィリアに全幅の信頼を置いている
実はフィリアが自身を惚れていることを知っていたりする（惚れた理由も知っている）

先走 1（前書き）

クリスマスの投稿です。

話のほうはすでに詰まっ
ていて、しばらく次話は遅れそう・・・読
んでくださっている方、すみません。

先走 1

重い大剣を振りかざし、一番敵の密集している所まで突撃を仕掛ける。

「はぁ！」

声と共に一撃を振り下ろす。

犬の形をしたものが、剣の重さに耐え切れず引きちぎれ、少しして残骸は霧のように四散していった。

姫様が危険だと仰っていた魔物をあつさりと倒したことに私は疑問を感じた。

なぜ姫様はあんなにも、魔物との戦いを心配していたのだろう？

魔物だつて襲つてこない、仲間を一匹倒したから畏縮しているのだろうか？

・・・この際どうでもいい。

早く城に帰りたかった。

ならば、することは一つ。

敵を殲滅する。

ただそれだけ。

四散した魔物を追う。

やがて、四散した魔物の一部に追いついた。

再び、剣を振り上げる。

さっきのような声は上げない、ただ、重いものを地面に落とすように大剣を下ろした。

ガキッ、と乾いた音がする。

この音はしとめた時の音ではない。

「おっ・・・ご・・・」

瞬間、腹部に重い衝撃を感じた。

きれいに手入れをしていた鎧も、打撃は吸収してくれない。

何がどうしたのか、私にはまったくわからなかった。

ただ痛みだけが頭の中を支配していた。

目はチカチカしている、白と黒、光と闇がごちゃまぜに交差して物を判別することなどできない。

数十秒して、視界は、ほんの少しだけ戻った、そしてうつすらと見える影が私を怯えさせた。

影は犬のような形をしていて、きっと魔物だ。

その影が、すごいスピードで近づいてきて・・・

「うつ・・・ぐああ・・・」

腹部を押さえたまま棒立ちになっていた私は、犬の魔物の体当たりを受け盛大に吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされて、後頭部を打ち付けた。

私の真後ろには櫟の木でもあったのだろうか？すごく痛い。

おなかが痛い、魔物に吹っ飛ばされたりしたせいだ。

あたまはもつと痛い、運の悪いことに何か硬いものに打ち付けたから。

目がチカチカする、たぶんたくさん痛くなったから。

すごくこわい、体がぼろぼろになって、ひとりだからだとおもう。

何で姫様が心配していたのか、それがよくわかった。

魔物は少数でも強いし、頭もいいみたいだった。

今になって後悔するのは馬鹿にもほどがあるが。

敵を追うために深追いしていたから、味方は私を見つけてくれないかもしれない。

最初から油断していた私の失策。

・・・あまりにもあつけないなあ、とこの状況で思った。

味方は来ないし、体は動かない、目も満足に見えない、剣とかどこかに行った。

絶望的な状況、誰もが想像できる最悪の結末が、目の前にある。

先走 2

絶望的ではあるけれど、まだ死にたくは無い。唐突にそう思った。姫様のお傍にいたい。

私の十余年じゅうねんは姫様のためにささげてきたつもりだった。

それがいま無に帰そうとしている。

死ぬことに対して諦めていたけれど、不意にそんなことを思い、死ねなくなった。

ゆつくりと立ってみる。

案外なんとも無かった、少しふらついた程度。

案外人は丈夫にできている物だな、どーでもいいことを考えた・・・一瞬だけ。

少しずつ光を取り戻していつている目を頼りに、剣を探す。

あった、すぐそこに。

一歩歩く。

「グルルルル・・・」

犬のような鳴き声を出している、犬型の魔物。

あの体当たりを受けたら、再び立ち上がる気力など無い。

本隊に戻るための最短ルートを頭の中で構築する。

ここからまっすぐ走っていけば本隊と合流できるだろう。

・・・あの魔物の向こうがわに行けたらの話である。

魔物を倒すために一人勝手に突撃していたので、この結果は当たり前といえは当たり前。

生きて帰れたら、私はたぶん泣くと思う。

息を整える。

すり足しながら半円を描くようにゆっくりと向こう側へ。

あんな目にあつたので、まともに戦おうなんて考えてなんていない。ゆっくり、ゆっくり。

半分ほどまで来れた、あと少し。

警戒はしているようだけれど、近づいてはこない。

このまま、逃げれる。油断はできないが希望がわいてきた。

「バウッ！」

すぐ後ろから、犬のような魔物の鳴き声。

魔物は複数いたのを忘れていた。

振り返る暇もなく押し倒された。

魔物が私の上にいる、のしかかっている。

犬型の魔物の足の爪が、私の腕や首の皮膚を引っかいている。

痛みはあまり無いが、皮膚に食い込む爪の無機質な感触と冷たさを感じる。

力を振り絞るがのしかかれた状態からの脱出は、無理。

死にたくないから足掻く、けれど死の結末は目に見えてしまった。

気がつくと、城にいた。

夢でも見ていたのかとベタなオチを一瞬考えていたのだが。

体にある無数の傷と、その傷から発せられる痛みが夢ではないと、教えている。

しばらく後、敬愛する姫様が私の元にいらした。

話を聞くと、あの後姫様が私の事を不安に思い援軍を出すように、

姫様の父（国王）に掛け合って、増援を出した。

その増援が本隊と合流、体勢を立て直し魔物の群れを退け、そのまま私を助けてくれた。

と、姫様や後輩の騎士から聞いた。

情けない・・・

その後、体の検査を受けた。

重い剣を無理な体勢で振り回したため、右人差し指にヒビと、右親指と小指が脱臼、あとすり傷刺し傷が

無数。

魔物の討伐隊の中で一番の大怪我らしい。

・・・情けない・・・

死ぬことは回避できたが、あらゆる方面から、きついお言葉を受けたのは言うまでもない。

先走 2（後書き）

あけましておめでとございます。

今回はだらだらと文字数を稼ぐ書き方となりました。

時間をかけた割には低いクオリティで本当にすみませんm（- -）m。

さすがにggdggdすぎますかねー・・・

次回は療養中のフィリアを中心に説明過多なお話になる予定です。

脱力（前書き）

「みんな、インフルエンザには気をつけようね！」

前回の投稿からものすごい穴が開いてしまった理由です。プロットを大幅に書き換えたりしたのがありますが。

と言う訳で、死に物狂いで投稿したからぜひ読んでね。

今回は前回の後書きに書いたとおり、療養中のフリーアのお話、新キャラも出るよ！

脱力

「あと一週間、最低でも一週間は様子を見よう、完治直前の今が一番危ないからね」

私を見てくれた医者が言う。

「はい、わかりました」

右手のヒビ以外は完全に完治、ヒビも一週間待てば治ると仰っている。

しばらく話をして、医者の方が部屋を出て行く。

私としては、早く訓練をしたいという気持ちもある。

かれこれ半月、ほとんどを自室のベッドですごしてるからだろう、と、自分を勝手に分析してみたり。

別に外出が許されていないというわけではない。

ただ、外に出ると訓練をしたいといった気持ちがあふれ出そうなので外出していない。

幸い、毎日のように姫様がお見舞いをしてくれるので、暇にはなっていない。

とか考えていると。

「フィリアさん」

扉の外から姫様の声がする。正直なところ、姫様の訪問が最大の楽しみとなっている。

「はい、開いてます!」

カチャリ、と扉が開いて・・・

「こんにちわ、具合はどうですか?」

姫様が部屋に入ってくる。

「大丈夫です、医者先生も一週間で完治すると言っておられましたし」

「早く治してくださいよね、私先輩の強さとか見てみたいんですよ。」

「あ、姫様、後ろにいる方は誰でしょう？」

今更ながら気がついた、姫様以外に誰かいる。

姫様も後ろを向く、気がついてなかったらしい。

「はじめまして、フリーア先輩」

「思い出しました、新しく近衛騎士として私の警護をしてくれるエルトリーゼさんです」

「長つたらしいのでエルと気軽に言うてくださいね、姫様、先輩」
「新しく・・・？」

私は不安で仕方なかった。

「頼もしいお人みたいです、剣の腕も確かだと騎士団長が仰っていました」

「わ、私は・・・クビ・・・？」

おそろおそろ聞くと、エルトリーゼさんは大笑いした。

「そんなんじゃないですよ、私はただの追加された人員です、たぶんフリーア先輩の部下扱いになると思いますよ」

ふあーーーーー。

大きく息を吐いた。

それと一緒に溜まっていた不安を全て吐き出した。

姫様の護衛と言う命の次に大切な職業を奪われたのではないかと、短時間の間で一気にブルーになったりしてた。

「でもなんで・・・今更増員ですか？五年以上姫様と共にいたのに？」

「この間の魔物退治の時みたいにならないようにするためだと騎士団長は言っていました、よく分からないですけどペアを組んでもらうためなのでは？」

姫様はそう言った。

ただ、当事者である私は冷や汗が流れていたりしている。

やはりあの時の独断専行は知られていたらしい・・・

チラッと、エルトリゼさんを盗み見る。

視線に気がついたのか、私を見つめながら口を開いた。

「がんばってフィリア先輩が突撃しないようにお手伝いしますから
任せてください、姫様」

この人、知ってるよ・・・私の失態・・・

姫様の頭の上にはハテナがある、何かに感ずいたようではない。
それはいい。

ただ。

その話が姫様の耳に届くようなことがあれば。

せつかくの姫様の忠告を受けたのにそれを無視して怪我。

・・・最悪、卒倒しかねない・・・

少なくとも信頼はなくなる。

そうなれば、どうなる？

侮蔑の言葉や蔑むような視線。

まずは精神的に攻撃をしてくるだろう。

何時間、何日とかけて。

心が弱り始めたら、次は身体を虐める。からだ言葉の責めも交えて。

・・・嫌いではないかも

「フィリアさん？」

「本当にごめんなさい！！！」

姫様に声をかけられて咄嗟に出てきた言葉が謝罪の言葉だった。

「お、怒っていませんよ!?」

姫様が狼狽している。

「あつ、何でも無いです、ちょっとボケてしてて、思ったより怪
我の影響がどうこうしているのかな?・・・アハハハハ・・・」
とりあえずその場を取り繕っておく。

「少し長く居てしまったようですね、エルトリーゼさん、今日も
う出ましょう」

「わかりました、姫様、お大事に、先輩」

「お大事にフィリアさん、明日も来ますね」

二人が部屋から出て行きしばらくたつた。

何とか、エルトリーゼばれずにすんだかもしれない。

が、あの子の事を思うと不安にしかない。

ふと、両手を見る。

「怪我、遅く治らないかな・・・」

つい不謹慎な事をこぼしてしまった。

父が聞いていたら殴り飛ばされていたかもしれない。

もう、外も暗い。

寝てしまおう。

これからのことはこれからでいい。

そう軽く考え、眠るため、目を閉じた。

それにしても・・・私って姫様のあんなことを妄想してしまったと
か・・・自分が考えている以上にやられるのが好きなのだろうか。
こんなことは15年生きていて、初めてだった、もちろんあんなこ
とを妄想したのも初めてだし、それについて考えたのも初めてだっ
た。

こんな無駄なことで悩んでいる場合ではないのに。

脱力（後書き）

今回のお話を要約すると・・・

近衛騎士団のエルトリゼが仲間になった。

近衛騎士フリーアはスキル「受け」を手に入れた。

近衛騎士フリーアは称号「妄想癖」を手に入れた。

こんな感じ。

百合百合しく無いと言われたので急遽フリーアに痛い設定を追加。

まあ・・・GLタグあるしこの程度は大丈夫と開き直ってみる。

エルトリゼの設定は次回に公表予定、一つ言っておくとエルはいい子でアホの子、だからフリーアを脅したりしませんよ、ほんとだよ。

今回で魔物討伐の章は終了します、次回は飛ばしていこうかと（戦闘的な意味で）。

せっかく残酷描写のタグがあるのに残酷な所が少ないと言われたので、次章は流血注意。

新たな任務（前書き）

長く待たせてしまった割には、内容の薄い、グダグダしてしまった回です。

次話は可能な限り早く出す予定なので、それまでの繋ぎとしてみてもらえれば幸いです。

新たな任務

「先輩、復帰後初めての仕事は私と一緒にしないと聞きました・・・」

「そ、そうなのですか・・・エルトリゼさん」

私の隣で落胆している、エルトリゼを横目に私は心臓がバクバクと脈を打っているようだ。

「あの、エルトリゼさん、前々から言おうと思っていたことなのだけれど・・・」

「はい、何でしょう？」

「私の失態の事、姫様には絶対に黙ってください！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それは大丈夫ですよー、憧れの先輩にそこまで言われたら、いえ、言われなくても言いませんよ」

ニコニコとエルは笑っている。

「本当にっ！ありがとうございます！」

「いやー、この程度のこととて頭を下げないでくださいよー」

頭は下げたままなので、エルの表情は見えないが、声が高い、喜んでいる様子だった、満更悪い気もないのだろう。

「それはいいですけど、何でそんなに仕事の失敗を隠そうとするんです？」

「耳に入ろうものなら気を失います、今まで話が姫様の耳に入ってこなかったのは皆さんがそう考えて口を閉じているからでしょうね」

「そのようなものなんですかね、いいたいことはわかりますけどね、あの姫様はそんなに精神は弱くないかと・・・」

「そのようなことは無いと思いますが、心優しい姫様です、私が剣の稽古の途中に血を見ただけで大慌てしてるほどです」

「いやあ、怪我と失態では違うものと思いますけどね、あの姫様猫

かb・・・」

エルの表情が変わった、瞳は一点を見つめたまま動かない。

「どうしました？」

エルの見ている方向を見てみたが何も無い、ただただ見慣れた光景しかなかった。

「いえ、何もありませんよ、そうですね、しられるのはヤバイと私も思います」

声色を変え、エルは私の意見に肯定した。

どうかしたの？そう問いかけたけれども、エルは違いますと言っていただけだった。

「フィリアさん、次の任務、決まったのですか？」

「はい、最近城からそう遠くない地域で活動している盗賊団については知っていますよね」

「ええ、街道に現れては旅人や商人の交易品や荷物を殺人をしてでも奪い取る残虐非道な集団・・・兵士やメイドからよく聞きました」

「私一人で動向を探り、可能ならば盗賊団を捕縛・・・長期間城から離れることになりますけどエルトリゼさんがいますから私がいなくても大丈夫でしょう」

「私の事は大丈夫です、でも、一人でそのような危険な任務を・・・」

「危なくなれば城に戻ります・・・戦うことが任務ではありませんから、引き際を誤るつもりはありません」

「本当に気をつけてくださいね、あなたには前科ありますから」

そう言って、姫様は少し微笑んだ。

「もちろんです、からかわないでください」

「出発は何時なのでしょう？」

「明後日です、それまでは調練に出なくてもよいとのことなので城内で羽を伸ばすつもりです」

「ゆっくり休んでくださいね、また任務に失敗すれば今度こそクビ

かもしれませんから」
姫様の悪気の無い言葉が胸に刺さった。

新たな任務（後書き）

キャラ紹介

エルトリゼ 17歳 女

シンシア姫の近衛騎士。

性格

- ・ 軽く浮ついている
- ・ 仲間思い

服装

- ・ ラフな格好が多い
- ・ 暖色系の色の服を着る事が多い
- ・ 城にいるときはもちろん騎士の制服や鎧を着る

武器

- ・ セイバー（直刀）
- 全長70cm 重量1.4kg

自分よりも年下なのに騎士（それもシンシア姫を警護する事を主とする近衛騎士）となったフィリアに憧れを抱いている
言動は軽いが行動は慎重

近衛騎士となる前は普通の兵士として仕事に従事していた

見慣れたはずの町（前書き）

あいかわらずグダっています。

ここからはじめるか結構悩んだのですが・・・私には城から出て行く前の描写はかけないのでここからのスタートにしました・・・

見慣れたはずの町

日の高いうちに着いたこの場所は、町と呼ぶにはあまりにも人の気配がなかった。

子供の頃は剣の訓練の合間に、母に連れてこられた町だった。

国王様が直接統治している城とその城下町と、他の国の関所との中継地点出会ったこの町は宿場として機能していたと同時に商人が別の町にて売れ残った交易品を安く売ってくれる商人の町としても機能していた。

要約すると、とにかく賑やかだった。

それが今は、人の気配がない町になってしまっている。

どうしてこうなったか、強盗集団が現れたからだろう。

最後に来たのは数年前とはいえここまで町が変わるとは思えない。

懐かしい町並みと、記憶と食い違う光景に違和感を感じながら、私は騎士団長に指示された住所にやってきた。

「ここにこんな建物なんて・・・」

思わず、考えたことが声になって出てきた。

地味で無骨でそれでいて巨大な建物があった。

この町は確かに来た回数はいくつか少ないがどのような建物があるかを記憶していたはずだった。

「・・・変わるものなの・・・？」

不思議な気持ちに包まれながら、目の前の建物のドアを、コンコンとノックする。

「ここは王国の兵士詰め所です、ご用件は？」

扉を開けることもせず、返事をされた。

「王国近衛騎士フィリアと申します、例の件についての話をするために王国騎士団より派遣されました、扉をあけてもらえませんか？」意識していたつもりはなかったけど、気がついたら口調が強くなっているように感じた。

・・・

しかし、待てども扉は開かない。

扉の向こう、遠いところで声がするように感じたが、来訪者である私の話をしているようには聞こえない。

騎士団長は本当に話を通してくれていたのだろうか？

こんな風にキレイに無視されると、対応云々よりもそっちのほうに気になってきた。

ゆうに十分は待った気がする。

さすがに、そんな気質ではなんだけれども・・・

「王国近衛騎士のフィリアと言う者です、騎士団長からの正式な依頼でここに来ました、依頼を証明する書状もあります、とにかく開けてくれませんか？」

声を大にして言う。

遠まわしに嫌味を言った（つもりな）ので、すぐにでも開けてくれると思う。

嫌味なんて言ったのは始めてかも、などと考えていたが・・・扉は開かない。

背中に吊り下げている大剣の柄を握ろうとして・・・その手を止めた、話を聞いてくれないとしても強行突破とか、そんな浅はかな行動をしちゃ駄目。

騎士としてそんなことをしては駄目、当たり前のことを考えた。

そんなこんなで、うだうだと、一時間は潰した・・・と思う。

こんなにも不快な気持ちになったのは初めてかもしれない。

「開けてください？はいりますよ！」

最後の警告のつもりで言いきった。

戸を押す。

ガチャ。

戸を引く。

ガチャリ。

いつのまに鍵をかけたのだろうか。

押せど引けど扉は金属音を立てて開かない。

・・・一度城に戻って騎士団長に相談しようか？

「誰だ、お前」

「まさか殺人強盗集団の一味ではないでしょうね」
真後ろから声がした。

怪訝な表情をしている女性と男性が・・・

「私は騎士団からその殺人強盗集団の調査をするために派遣された
フリーアです、このことを証明する書状もあります、この中に入ら
せてください」

頑張って穏やかな顔を作った。

不満を顔に出してはいけないと思った、今来たこの人たちは何の関
係もないから。

「とりあえず、背中 of 剣を下ろしな、こっちは丸腰なんだから、お
前がやつらの仲間じゃないなんて保障はないんだから」

言われた通りにする、彼女たちの言うことは正論だから。

男性のほうが私の剣を手取る。

「隠し持っている武器もない様子だし・・・それじゃあ来なさい」

見慣れたはずの町（後書き）

ここで終わらせてもいいものかと案外悩んだのですが・・・
このまま続けてもやはりグダグダするのは目に見えているのでこ
でいったんきろうかと思っています。

最後になりますが

3 / 1 1 の地震の被災者の方、本当に頑張ってください。
今はまだこんな駄文をつらつらと連ねるだけの私ですが、私の書い
たお話を読み、面白いと思ってくれる人がいてくれるように頑張り
ます。

中庭で（前書き）

今回は城に残っている姫様とエルの小話。

断章のような感じで、軽い気持ちで書いていたのですが・・・

まあ、内容についてはこれくらいにすると、私の書く駄作に付き合ってください方、いつも読んでくださっている方に感謝の気持ちを込めて。

中庭で

私はじつと的を見据えた。

左目を閉じ、右目で標的を狙う。

周りのものなんて何にも見えない。

眼中に入らない。

地をしっかりと踏み、風を感じる。

風の向きや重力のことなんて馬鹿な私にはわかりっこないが、はっきりと自分の間を結ぶ曲線が見えている気がする。

「エルトリーゼさん？」

私の思い描いていた軌跡を微妙に外した。

少しばかり下に行ってしまった。

バキヤ、と鈍い音を立てて砕けたりんごの破片が落ちる。

「ひ、姫様、どうなされました？」

微妙に声が引きつってしまったが気にしない。

「あらあら、何をしておられたのかしらね？・・・ふふふ・・・」

「パチンコでりんごのみを落としてただけですよ、集中力を高めるのにいいんです、ただそれだけですよ？アハハ・・・」

笑って見せたが声が自分でも分かるくらい小さかった、萎縮しているわけではないと思っていたのだけれど。

「昨日の事なのですけれど、フィリアに何を話していたのかな、と少し気になりました、私と目を合わせた瞬間に視線を逸らしたり、私が視界に入ったとたん慌ててその場から逃げるように立ち去ったり、気になる、怪しい行動を目の当たりにしましたからね、その辺りきっちり話してもらいましょうか、と思いましたが」

私って馬鹿だなー、何で姫様が話している間に逃げなかったのだろ
うか？

答えは簡単、足がすくんでいただけです、ただそれだけです。

まあ、逃げたところで一兵卒の命運なんてたかが知れてはいるが。

「せんぱいはね、しらないのですよ、ひめさまのほんしょうを、そ
ちのほうめんではわたしはひがいしゃもといけいけんしゃですか
ら、けいこくはすくなくともしておいたほうがいいかとかんがえま
してね」

片言になつてよ、すごく棒読みです。

でも呂律がうまく回りません、誰か、可哀想な私を助けてください。

「貴女で飽きて以来もう遊ぶ気は起きないのだけれど？というより、
出来ないと言えばいいわね、痛いだの、助けてだのうるさいから・

・

そのおかげで私は万々歳でした。

「それに、何も知らないとか嫌じゃないですか、姫様は、先輩の好
意を知った上で、わからないとぼけているのですよね、何だか・

・

「私の趣味に踊らされて可哀想とでも？」

「そうです」

私はここぞとばかりにきつぱりと言った。

いつもは私の話なんてなあなあで済ませてしまう姫様だけど、今だ
けは聞いてくれている、ならば、私からはつきりというべき、先輩
は城の誰も見ても、姫様に対して特別な感情を抱いていると。

姫の命を自らの命とし、正に剣に盾にと尽くしてきた。

姫様の大事には必ずそこに先輩がいて、姫様の笑顔のとなりには先
輩の笑顔があつて・・・

「私がね、フィリアの好意以上の気持ちを受け取れると思っている
の？」

「そんな」

「一つの国のお姫様が、ただの兵士と、まで言えばお分かりになる
かと？」

ああ、何となく分かったきもする、納得はしたわけではないけれ

ど。

「貴女みたいに、虐める側と虐められる側で単純にわかりやすく分かれるわけではないからね、ここから先は、いじめっ子の娯楽じゃすまないと思うのだけれど」

エルトリゼは何も言わずに立ち去った、今までならそんなことはなかったけれど。

意外と私も乙女なのかな、なんて考えてみた。

案外似合っているかもしれない、なんだかんだでフィリアは好きだ、エルも応援してくれているようすだ、使いや顔見知りの兵や騎士、騎士団長までもが期待している節がある。

「でも、やっぱり無理かな、父さんや母さんや偉い人がなんていうか」

中庭で（後書き）

今回もお読みくださってありがとうございます。

前書きにも書きましたが、今回はエルがこの前のことを問い詰められてあたふたしているだけの予定だったのですが・・・シンシア姫は意外と素直な子だったようです。

S設定で進めようと考えていたのだけれどなあ・・・

不安とイライラと（前書き）

本当にすみません。

最初に謝っておきました。

と言うのも今回は長い間お待たせさせてしまったのにあんまりかけてないからです、すぐ今回は短いです。

次回以降はこんなことにあまりならないように、気をつけていきま
す、今回は場つなぎ程度にお読みください。

不安とイライラと

「あたしはそんなようには思っていないからな」

「僕も同じです、あなたは悪くないです」

私を中に入れる手引きをしてくれた二人は積極的に話しかけてくれているが、他はほとんど無視をしている。

「私は・・・大丈夫です・・・」

そう言うと、私の体は萎縮してしまった。

なんだか居心地が悪くて、気持ち悪い。

「二人はあんなふうに私を無視しないんですか」

よく考えればこの質問はこの場の空気を悪くするものと分かったのに。

何か言い出さなければと無駄に焦っていた私は、そう質問してしまった。

奥の数人がこっちを見ていることに気がついた。

「中途半端に関ったからね、このまま放置するとこっちの寝覚めに
関るから」

女性はその視線に構わず言う。

「私は姐さんについていくだけですし、その・・・」

青年はうつむきながら言う。

「まあ、今日とは言わないけど近いうちにまた事件は起こる、それを待って、情報収集に勤めるといいさ、手伝ってやるからね」

「あの、ありがとうございます」

不安とイライラと（後書き）

次回予告。

超強い敵と戦います・・・の予定です。

恐ろしさ（前書き）

初めての方、はじめまして。

前話をお読みになってくれた方、ご愛読ありがとうございます。

更新を実質一ヶ月以上放置してしまったので、今回は特に頑張ってみたつもりです。

それでは続きをどうぞ。

恐ろしさ

「とりあえず事件のおこった現場巡りでもするか」

「はい、どこに行くかは任せます」

とりあえず町の外、特に商人が行き来するらしい街道に行くこととなった。

「そついやあんた、名前聞いてたか？」

「おそらく言っていないかと・・・私は近衛騎士団所属のフィリアと申します」

「死ぬかもしれない任務につかされちゃったわけですね・・・」

青年が不意にボそりとつぶやいた。

「そんなに酷いんですか？」

「ある程度の実力のあるであろう商人の手付きの剣士すら死体になった、あたしらの仲間も１７人死んだよ」

いたたまれない気持ちになる。

「そうですか・・・」

「まあ、僕たちは死ぬのが仕事みたいなところがありますし、僕もみんなは覚悟は出来てると思います」

街道にはすぐについた。

あのような事件があったと聞いたけれど、人通りは多いように思える。

「ここ以外で城にいく道は無いに等しいからねえ、びくびくしながら歩いてるんだよ」

女性は私の疑問を感じ取ったのか言ってくれた。

さつとここを通り抜けようとしているようで、全員がせかせかしていてあたりは重く不可解な空気が漂っている。

「最近はこんな昼間から堂々と殺人しているようで、今も安全ではないんですよ、僕は早く立ち去りたいかなあ、なんて」

「馬鹿か、あたしがびびってどうする、たとえ死んでも人を守る

「んだろ？」

「助けてくれええ！！」

悲鳴が聞こえた、辺りを劈くような声が。

「うわさをすれば…ですか…」

「死にたくなかったら、兵舎に帰れ」

「・・・戦います姐さん」

「とりあえずは時間稼ぎだ、避難と援軍が来るまでの時間稼ぎ、フ
イリア武器はある？」

「背中の中が見えませんか」

「行きますよ！」

青年の声と共に走り出した。

すでに血溜まりがあつた。

その中に一人の男が居る。

服に靴、帽子。

普通に近くに住んでいる人のように見えた。

武器も何も持っていないようなのに？

「あんたがこの辺りで有名な人殺しか？」

「・・・ごうああ・・・おおおお・・・」

声と思えないような声が男の口から聞こえた。

「さすが殺人鬼、頭が逝つてるとしか思えないねえ」

男が私を睨んだ、ターゲットは私らしい。

「！！」

一瞬の間に私の目の前に男が立っていた。
人間とは思えない動きだった。

「ボヤツとすんな、距離を置け！」

いわれたおかげで動けた、転ぶようにして男の背後を取る。
「動かないください！」

男の背中に切っ先を押し付ける。

「フィリアさん、危ないです！」

「え？」

「さがれ！」

ガイインと金属の鈍い音がする。

私の体が弾け飛んでいることは分かった。

青年が弓を射るがそれらに臆することも無い。

「こいつっ！」

青年の弓に男が注意している間に女性が身の丈程ある戦斧せんぶを振りかぶった。

渾身の一振りなはずだった。

私も戦わないと、その思いに駆られ、剣を持ち直し突撃する。

「はああああ！！！」

剣を真一文字に振りぬいた：はずだった。

「嘘・・・」

刀身を掴んでいた、手からは血すら流していない。

「早く弓を射れ！」

確実に当たるであろう胸を青年は狙っている。

体が不意にひょいっと浮き上がった。

「なっ！？」

「剣を放せ！」

そんな風に言われたように感じたけれど、何が起きているのかに思考が行ってしまつて、剣を放さなかった。

いつそう高く持ち上げられる。

男の顔がはつきりと見えた。

帽子の影で見えなかった顔がよく見えて・・・

「あぐうっ！！！」

頭がパニックになった。

重い衝撃が肩にかかった。

何がどうしたのかわからない、何よりもまず疑問が浮かんた。

恐ろしさ（後書き）

基本的には主人公のフィリアには痛い目にあっていただこうと思っています。

と言うのも、攻撃され続けて、そのあとでギリギリで何とか根性で敵を倒すのが燃えるので（私ほそんなの好きです）、もしもそのままやられまくったらと妄想も広がりますしね。ただし妄想を文章に出来るかは棚に上げさせてもらいますが。

次回、敵を倒すぞ！

人型の最期（前書き）

お久しぶりです。

応援のおかげで何とか這い上がって来れました、約二ヶ月ぶりの投稿です。

久しぶりだと言つのにクオリティは相変わらずorz物です。

それでも何とか頑張って書きました、またよろしくお願いします。

人型の最期

「・・・っ」

「起きたか・・・」

目の前には女性がいた、私を助けてくれた人だ。

「おい、セイル、あいつはどうしてる？」

あの弓を持つてる人はセイルという名前なんだ、なんてボヤッと霧のかかった頭で思う。

「私たちを探してます、一般人に被害は出なくなっただしょうが・

・私たちが仲間と合流するのは無理かも」

「そいつは私たちを狙ってたんだな？」

「ええ、でないとこんな茂みの中まで来ないでしょう」

一呼吸をおいて、女性が言う。

「私が姿を出す、あなたの言うことが正しいなら絶対私を逃さない
だろ？その間にフィリアつれてここから離れる」

それって、囹？

「絶対仲間を連れて来い！死にたくはない！」

力強く言っではいるけど...

「そんなの絶対ダメです！俺は！」

負けんばかりの声をあげ、セイルさんは立ち上がった。

女性はセイルさんの口をふさぐ。

「この場がばれたりしたらどうするんだよ...！」

茂みの奥の方を睨んでいる。

「あんたら、今すぐ逃げな」

「戦います、絶対離れません」

セイルは力強く言う。

セイルさんがこの人に惚れている気がする、今この状況で思っことではないけど。

「悪いけど、歩けるかい、フィリア？」

「はい、腐つても近衛騎士です、戦えます」

「戦うつて・・・」

重いから、唯一着けてきていた鉄の胸当てを外す。
肩が痛い、けどその程度。

いつも使っていた大剣も、使えそうにないから胸当ての上にそっと置く。

代わりに、腰から一本の短剣を引き抜いた。慈悲の剣、ミセリコルデ。

私たちがそう言い出したから、諦めたのか。

「危なくなったら、逃げなよ？」

そう言う。

逃げる気なんて無かったりする、ついさっき助けてもらった、私にとつては大きな恩。

安易で簡単なものではないかもしれないけど、この場でお手伝いできるならした方がいい・・・そう考えた。

それに、姫様にも怒られそうだった、死にそうだったけどみんなが命からがら生還しましたなんて・・・

いや、でも、死ぬのは嫌かな・・・

失敗すれば、前とみたいに死しか見えなくなる。

でもここまで考えてて、今更帰るってのはダメ。

ついさっき何を考えたの？

自身に問いかける。

二人の恩と姫様のことが、答えとして帰ってきた。

最後の最後で萎縮してしまっただけど、それから自身を奮い立たせた。ほんの少しして、女性に茂みから抜け出る。

後続く、利き手じゃない方で助かった、右肩だったら、短剣と言

えど持てなかったと思う。

「さつきと同じ、斬ったら続けて」

「分かりました」

あの人間まで一直線に駆ける。

「だああ!!」

さつきと同じように斧が受け止められる。

続いて私が飛び掛る。

女性のわき腹を掠めながら、剣を突き出す。

体が死角になつて、剣の動きが見えなかったのだろうか、あっさりとはらに突き刺さつて。

「当てる!」

「はい!」

セイルさんの引き絞る弓は、頭を狙う。

躊躇い無く放つた矢はそのまま人の頭への軌跡を描いていた。

ぐぎゃあああ・・・

「狙つてやったか?満点だ!」

右目に矢が刺さっている、セイルさんらは喜んでいるけど、私は少し痛々しく感じた。

何人と殺めていたとはいえ、人は人。

「殺すぞ!」

声をあげ、戦斧を水平に構える。首を刎ねる気だ。

そんな所を見たくは無い、ほんの一瞬目を閉じた。

と思つたら、振動がきた。

一瞬、首を刎ねた振動だとか余波だとか考えていたが、そんなことではもちろんない。

くそつたれ、そんな言葉が聞こえたいがした。目を開けて。

さつき見た光景があった、あの人間が戦斧を受け止めている光景。女性はずぐさま距離を取った。

死に際なんて見たくない何て言っていられない。

一瞬距離を取ることも考えたが、押し切れると考えて、私は人に飛び掛った。

右手で叩き落とそうと考えたのだろうか、手を振り上げる。

でもまったく反応が遅い。

首筋に剣を突き立てて。

「あれ：？」

左目は首に突き立てた剣をしっかりと見ている、青い血液を噴き出しているのを見ている。

自身にも降りかかってきていたほど、勢いがある。

「このまま押し切って！！」

違和感を振りほどき、ここぞとばかりに声を上げた。

二人とも声を上げて反応してくれる。

2本目の矢が突き刺さるのを確認した、また頭だ。

そして、そのすぐ後に、戦斧が私の頭の上を通過して・・・

人型の最期（後書き）

久しぶりに書いたのですが・・・

書き方が大分変わってますね、何故か・・・

元に戻した方がいいのかな？

とりあえずしばらくは続きを書くことを意識します、2ヶ月も待たせてしまったので、とにかく続きをつて感じて書いていくかも。

次回、事後

気がつかない痛み

すごく疲れた、すごく。

「すまないな、下手したら死んでいたかもしれないのに」
すぐ後ろから、あの女性の声が聞こえた。

「いえ、構いません生きて帰れますからね」

「しかし、何なのでしょう？この人間・・・」
セイルさんが言う。

人間とは思えない力、薄い水色の肌、青い血液。

人間なの？

そんな疑問すら出てきた。

「そんなのは後でいい、まずは町に帰るぞ、大騒ぎだろうからな」

「はい、そうですね、かなり外れに來ましたし私がここを確保しておくんで」

「わかった、と言うわけでフィリア、帰るぞ、そんなよく分からん液体だらけてるのは気分悪いだろ？」

そういえば、頭の天辺をぽんぽんと叩く。

ベトベトしてた。

あの人間の血みたいなのを頭から浴び続けていたから、髪の毛なんか真っ青になってる。

青い血なんて見たこと無いから、現実味がなくて、こんな異常状態でもわりと平気だった。普通に赤い血だったら、今ほどの血を浴びたら叫び上げてたと思う。

そのあたりは皆も同じらしい、女性の方なんかケタケタ笑ってる。

「手を貸すぞ」

視界の中に手が現れた。

「ありがとう」

手を取りながら振り返る。

「フィリアさん！早く目を拭いて！」

セイルさんの方が布、ハンカチを取り出した。

手にそれを取ろうとすると、女性の方がハンカチを叩き落とした。

「馬鹿！擦らせてどうする！？」

セイルさんを叱咤し、女性は私を背中に乗るよう促した。

「いいか？目を触るんじゃないぞ！」

私を乗せて駆け出す、疲れているはずなのにたぶん全力で走っている。

当の本人である私には何があつたのかさっぱりわからなかった。

「…」

「…」

姫様もエルもそこにいるはずなのに、何も言ってくれない。

「片目が見えなくなっただけだ、訓練を積みめばまた動けるさ、実際目が見えず眼帯をしててなお戦士として活躍している人が私の知り合いのにもいる、この城の兵士にも眼帯をつけているのが2人いたのを知っているだろ」

「騎士団長…」

自室に戻って、初めて声をかけてくださったのは騎士団長だった。

「二人も、あまりフィリアに冷たくするな、これはまさに名誉の負傷だ、何人もの人間を殺害してきた怪人から人を救ったためにできた傷、躊躇い無く戦ったからこそ、この傷ですんだのかもしれない」
騎士団長は続ける。

でも、姫様も、エルも本当に反応が無い。

「いえ、すぐくうれいですよ、この傷も団長の言う名誉の負傷であることくらい言われなくなつて分かります」

まるで腫れ物を扱うように、二人は態度を変えた。

優しくしてくれているとか、心配してくれているというのは違う

感じだった。

お医者様は、肩の矢傷は治ると言った、目の傷は治るけれど、目が見えると言わなかった。

でも、治るかもしれない、治らなくてもまた訓練をして剣を振り姫様の前へ出れるように頑張るつもりだった。

私が近衛騎士として頑張れば二人は親しくなってくれるかもしれない、そういう希望を胸にしまった。

気がつかない痛み（後書き）

何とか生きて帰ったフィリアですが今回は今までと比べられない、一生モノの怪我をして帰ってきました、二人はきつと、強いはずのフィリアがこうした相手に恐怖と殺意を覚えているかもしれません。

さて今回はいつも以上にぐろい要素を突っ込んで見ました（それでもちやちいと言う人が大半でしょうが）、さてファンタジーだと眼帯の男の人は歴戦の戦士である設定が多いですが、女性の場合はどうなんでしょうか、それ以前に女性の眼帯はあまり知らないしイメージも湧かない・・・

次回、療養中に訪問者。

大きな書庫と探し物

「フィリアさん、失礼します」

扉をコンコンと叩き人が二人、入ってきた。

二人とも手に花を持っている。

「お姫様がいたのですか、これは失礼」

女性の方が頭を下げる、続いて男性の方も。

「はじめまして、フィリアさんのお知り合いで？」

「はい、二人はあの時私を助けてくれた…」

「私はアイカ、こっちはセイルって名前です」

「僕たちはフィリアさんのお見舞いに来たのですが…また時を改めます」

「私の方がお邪魔のようでフィリアさんがそうならば私が出て行きます」

「みんないてくれて構いませんよ」

と、なんだか返答に困ったので微妙に言葉になっっていないような文を言ってしまった。

「いやあ、ちよつとフィリアに話したい事だったんだが・・・」

「どうしたんですか」

「いや、動けるならちよつとここの図書館みたいなところに連れて行く予定なんだが」

「行けるのなら行かれた方がよろしいのでは？私達は構いません」

姫様が言う。

ニコツと笑って言うてくれたのが嬉しかった。

「すみません」

そういつて二人の後をついていった。

「あのですね、あの時の敵覚えてますよね」
忘れるわけが無い、あの時の強すぎた敵。

命からがら倒せたけど…

「あれから少し調べてみたんですけどね、古い書物に魔物の仲間みたいなことを書いていたんですがそれ以外のことがまったく分からなくてですね・・・」

「それ以上の事を探すためにここまで来た、一国の要の城の大図書館になら絶対あるはずだと目星をつけたまでは良かったんだが、問題は城に入る術でね、悪いとは思ってたんだがお見舞いを隠れ蓑にしたよ」

「いえ、そのためなら構いませんしお手伝いもさせてください」
素直に言った、私の気持ちだ。

「それじゃ、長丁場になるかしんねーが頼むよ」

「はい」

「まあしょうがないさ、私たちも見つけないし、目撃例も少ないっばいしさ」

結果だけで言うと、何も無かった。

彼女たちの言う魔物の類と言う記述すら見ることは無かった。

「出来ればまた来たい所だけど、またしばらく仕事があるから」

「付き合ってくれてありがとう、時間が取れたらまた来るよ」

そう言っただけで私たちは別れた。

大きな書庫と探し物（後書き）

今回も読んでくださりありがとうございます。

最初の頃みたいにとんどん話を進めたいと思いつつも、こういう断章的な短いお話も大切なんだなぁといろいろなお話を読んでみたら思いました。

ただやっぱりかっこいい戦闘シーンとか、筆者すら赤面な恋愛シーンとかも書いてみたいなぁとおもいつつ。

ただ、とにかくいろいろやるには少しずつでも話を固めて進めないといけないわけで。

しばらく数カ月分のストックができるほどまで書き込みたいな・・・

久しぶりの剣

「エル、行きますよ」

「はい、先輩！」

訓練用の木剣を振りかぶる。

木で作られてはいるが、重さは本物と大差ない。

大差ないから頭にでも当たるとどうしようもない。

そのことは昔から言われていたけど。

今は本気でかかる。

足を動かす。

剣を目の前に抱えたまま。

「ハア！」

そのまま突き出す。

少し体をずらしエルは避ける。エルの剣が同時に突き出された。

突いた剣をエルのほうに横に振り、剣に振り回されるように自分は動き避けた。

エルの直剣は私の方に常に切っ先を向けている。

少し距離を取り、助走出来る間を作る。

剣を下げ携えるように持ち直す。

そして走る。

と、同時にエルも飛び出す。

逆手の持たれた軽量の剣はすでに突き出されていた。

速さに乗れていない状態で下げた剣を振り上げる。

利き手に少し痛みが走った、対して力が無いのに重い剣を無理して振り上げたからだろうか。

カンと木のぶつかる音がしてエルの手から直剣が飛び出す。

エルは別段驚いたりしていない、最初からこう思っていたのだろうか。

「目がなくても、やっぱり先輩は強いですよ」

剣のなくなった手を頭の上で組んでいた。

「いや、まだまだですよ」

そう、まだ。

さっきだって腕がつった、療養中に少し力が落ちてしまったみたい。

「目はちゃんと見えているんですよね？」

「うん、片目でも何とかね」

目を包んでいるガーゼに手を当てた。

傷はなくて、綺麗に治っているとか姫様は言ってくれた、騎士団長は義眼を入れれば他からは目が傷ついているなんて分からないだろうとか眼帯を付けてみたらどうだといった。

なので、ガーゼなんてもういらなただけ。

そんなことしても私が強くなるわけでもないし、私が弱いところを見せたかった。

このガーゼは私が弱いからつけているんだと自分で思ってた末だに付けている、他の人には目が痒いとか言つてごまかしてはいるけど。せめて魔物くらいには戦えるぐらいに強くないととてもこれを外す気にはなれない。

「すいません、聞いてしまつて…」

物思いに浸っている私を、怒らせたと勘違いさせてしまった。

「そんなことは無いよ」と、一言入れておいた。

「人相手なら、騎士団の中でもかなり上なはずなんだが」

騎士団長が外から私を見ていた。

自分でもそう思う、けっして思い上がりではない。

仲間同士での訓練ではともかく、本当の死ぬ気で向かってくる相手を手玉に取ることも出来たのに。

型の無い、あの時の犬のようななれない相手ならともかく、人の形であつたあの魔物にも負けたのが私には納得できない。

技量で負けていたわけではない、では単に力負け？

それなら言い訳もたつけど、私は力を捌くだけの技量があつたはずなのだ。

今はただ、ひたすら自身を鍛えるしかない。

久しぶりの剣（後書き）

何とか更新しました、お久しぶりです。

今回は少し時間を経過させて、剣を振れる程度まで立ち直れたというところでは。

主人公は実際のところ強いはずなのに私の登場させる敵が強すぎでむしろ弱く見えるといただきました。

フィリアの剣の腕ともども私の筆の早さも強くしたいと思っています。これからもよろしくです。

塞ぎこんだ思い

「おい、終わったんだろう?」

「あ、はい」

慌てて、剣を下げる。

きつちりと痛みが来る、攣ったのかな。

「エルは少し片付けろ、お前は医務室までついて来い」

それだけ言い、私に手招きをする。

訓練場で貸される木剣をエルに渡し、私は騎士団長へついていった。大きな扉を抜け、上品な雰囲気のある廊下を歩いている。

いつもの光景なはずなのに、気分が沈んでいるせいか、周りはいつも以上に華やかに見えている。

強くなる、そう思ったのに、やっぱりそれだけじゃ何をすればいいか、どこまですればいいか、それが見えない。

剣を振るっていけば筋肉は付く、走り回れば脚力は上がる。

それらをやってどうなのか、仮に力をつけようと足を速くしようとそれだけでは私の理想の強さにはならないことは明白。

魔物に負けない強さはどうすればいいか。

「団長・・・私には、経験が無いのでしょうか…」

「ああ、そうだな」

団長の言葉は案外重かった。

経験なんてどうやってやればいい?

力はいつでもすぐにつけようとすることは出来る。

でも、経験はおいそれと体感することは出来ない。

「言うておくが、姫をほおって置くようなやつに魔物と戦わせることなんて出来ないからな」

少し間をおいて出てきた団長の言葉。

「ここ最近ずっと気がつけば敵の、魔物の本を読み元気があれば訓練だ、姫は基本エルに任せているんでろ」

「はい、でも私は強くないと・・・魔物から姫様を守れませんし」

「お前の仕事は、確かに姫の剣であることも含まれるが、それ以上に大切な役目が盾であることだろうが」

団長の言葉はいつに無く冷たい。

「弱ければ守れません」

「そういう意味じゃない、盾になって死ぬだけなら誰でもこなせる、極端に言う子供だろうと老人だろうと、だがお前もエルも似た年齢で性別は女だ、お前以上に強いやつは城にいるのにわざわざ二人に剣と盾を任せているんだ」

ふう、と団長が息をついている。

私は下を向くことしか出来ない。

「いいか、姫はあと数年すれば国王らの決めた婿と結婚だろう、自由にできるのはそれまで、それまでの間、姫は今もこれから重圧だけの世界に身をおくんだ、だが人間がそばにいれば重圧は減るかもしれない、それがお前のような歳の近い人間ならなおさらかもしれない」

「あと数年？」

「ああ、その数年の間がどれだけ長いか、俺にはわからん、だがその時間の間、お前には姫の支えになって欲しいんだよ、誰も鬱な姫は見たくないんだ」

それはそうだろう、姫様は国の人気者で、この国に居る人たちのほとんどがそんなことを思うはず無い。

「ほら、しばらくは休暇だ、ゆっくり考えろ」

今と昔とで、姫様を守りたいと思う気持ちはまったく変わらないはずなのに。

どうしてこんなにも気持ちが晴れないのだろう。

何が変わったんだろう。

塞ぎこんだ思い（後書き）

主人公、実力もあるはずなのに、心まで弱くは無いのに、これまでの失態（と呼べるほどのものでもないのだが）に心を痛めている模様、これから主人公は脱却できるのか？

騎士で一番えらい騎士団長からの至極簡単な言葉の意味を考える事ができるのか。

と言うわけで次話は新章スタート

予定

たぶんね。

正月中には出せるように頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773p/>

騎士物語

2011年12月1日20時48分発行